資料２

第25回福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会議事概要

Ⅰ 開催場所および場所
日時：2023年6月5日（月）13:30～15:30
場所：葛尾村村民会館（〒979-1602 福島県双葉郡葛尾村大字落合字落合16番地 ）

Ⅱ 委員
別紙名簿のとおり

Ⅲ 資料
□ 議事次第
□ 参加者名簿
□ 資料１ 福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会委員名簿（2023/6/5版）
□ 資料２ 福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会（第24回）議事概要
□ 資料３ 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校活動報告資料
□ 資料４ 令和５年度双葉郡教育復興ビジョン推進体制・委員会等の構成、取組一覧
□ 資料５ 令和５年度双葉郡教育復興ビジョン実施計画
□ 資料６ 令和５年度双葉郡教育復興ビジョン取組実施報告0605
□ 資料７ 福島県双葉郡の教育 これまでとこれから
□ 資料８ Ｒ５双葉郡町村立学校等の現況調査票
□ 資料９ 楢葉町資料「大地とまちのタイムライン」
□ 資料10 福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校 令和２年度研究開発実施報告書

Ⅳ 議事
１． 開会
１） 開会挨拶（舘下副座長・双葉町）
本協議会も25回目の開催となり、委員の皆様からの大きな支援と指導に感謝申し上げる。教育長会としては、５月には唐招提寺講堂で行われた東日本大震災義援金贈呈式に参列し、南都隣山会より高額の義援金を頂いた。各教育委員会で有効に活用したい。また、復興庁と文部科学省への要望活動も行い、引き続きの支援を現況を伝えながら要望したところである。双葉郡の教育復興も新たなステージに入っている。第３期推進計画に基づき各種事業を着実に実践していきたい。

２） 委員自己紹介 （省略）

２． 前回（第23回）議事概要確認【資料２】
・双葉町「来年度に新校舎が完成見込みである」を削除
・大熊町 落成式の日付を削除

３． 議事
１）ふたば未来学園中学校・高等学校活動報告【資料３】
○ 郡司委員（ふたば未来学園）
（個別具体的な活動内容は資料３のとおり）今年度の入試においては、中学校・高校ともに定員がすべて埋まり、活気あふれる学校になっている。来年度はアカデミーの静岡の子どもたちが帰還し、中高一貫の１期生が高３となるため、開校10年目にしてようやく完成年度を迎えるが、ここが学校経営の再スタートとなると考えている。今後、域外からの活力を呼び込むとともに、福島イノベーション・コースト構想や福島国際研究教育機構（F-REI）との連携が課題となるが、期待に応えられるよう学校運営を進めていきたい。
○ 里見委員（文部科学省総合教育政策局）
〔質問〕取り組みのレベルが上がっているが、そのために必要な専門家を集めるという点において工夫

していることがあれば教えていただきたい。

○　郡司委員（ふたば未来学園）

〔回答〕県立学校であるため、県教委の計画的な人事異動によるものだが、文科省の配慮によりＷＷＬ事業に向けて１名の加配を受けている。この加配の教員は本校でＡＬＴとして勤務し、海外交流にも関与している。このような人事面での支援にも感謝申し上げたい。

○中田座長（放送大学）

〔質問〕ＮＰＯ等からの支援を組み入れているが、そこについても説明をお願いしたい。

○郡司委員（ふたば未来学園）

〔回答〕県教委の支援を受けＮＰＯ法人カタリバが本校内で活動しており、本校の探究活動に大いに貢献していただいている。また、地域においても、ＮＰＯであるなしによらず、さまざまな方に本校の教育に関わっていただいている。

○笠井委員（浪江町）

〔補足〕私は未来学園の中学校の立ち上げに関わったが、あの時にイメージして描いた姿が具現化されていることをうれしく思う。一つの町村、あるいは一つの学校だけでは味わえないダイナミズムを感じるとともに、今後の取組において未来学園の生徒の姿は大きな指針になると思われる。今後ともよろしくお願いしたい。

○堀家教育総務課長（福島県教育庁）

〔補足〕県教委からふたば未来学園のＷＷＬ（ワールド・ワイド・ラーニング）について説明したい。同校はこれまで教育復興のシンボルとして積極的かつ意欲的な取組を進めてきたが、今後は単なる象徴ではなく、教育復興を支える基盤になる必要がある。そのために県教委としては、ＷＷＬのネットワークコンソーシアムを形成し、蓄積された取り組みを県内全体の財産として継承し、広域に展開していきたい考えである。

２）今年度の各取組実施状況について【資料４】【資料５】【資料６】

○事務局（清野）〔全体〕

（個別具体的な内容は資料４～６のとおり）今年度のビジョン推進体制・委員会の構成は前回の協議会で承認されたところである。実行委員長は例年どおり校長会から、実行委員も各校から選出いただいた。今年度は実行委員会も行事も基本的には対面で進めていく予定である。「双葉郡教育復興ビジョン推進計画書」の第３期に基づき、これまでの実績の経験値の共有や取組のオープン化も意識しながら、引き続き実行委員の先生方と検討してまいりたい。

○笠井委員（浪江町）〔ふたば生徒会連合〕

初回の委員会では、新しい教師たちも多いこともあり、共通の認識を持つために説明や話し合いを行った。私自身がこの組織の立ち上げに関わった経緯があるが、「ふたば生徒会連合」は全国各地の自然災害被災地のために何かできないかという生徒の声から始まったものであり、改めて設立当初の思いを共有したところである。今後は、生徒会連合の活動が各学校の生徒会や教育活動の充実につながるように展開していきたい。

○堀本委員（川内村）〔ふるさと創造学教員研修会〕

震災から 12 年が経過し、現在の小中学生は震災を経験していないか、あるいは記憶していない世代である。また、教員自身も、なぜこの取り組みを行っているのか、どのような資質を育てようとしているのかについて理解が十分ではない。「ふるさと創造学」のような広域の学校間の取り組みは全国的にも例がなく、非常に貴重なものである。改めて最初の思いを振り返るとともに、刻々とフェーズが変わる中においても、復興に貢献する人材育成に資することができるよう、さらなる充実を図っていきたい。

○舘下副座長（双葉町）〔双葉郡地域学校協働本部会議〕

双葉郡地域学校協働本部会議は６月 19 日に予定している。双葉町においては、文字どおり地域と学校が協働した取組が進められているが、もともと学校というのはそうして成り立ってきたものであることを震災を機に改めて感じている。場所は双葉小中学園の「コミュニティハウスにじいろ」で開催されるが、ここでは地域の人々との交流を図りながら学校教育の基盤を築いている先進的な取り組みが行われている。この会議によって今後も地域学校協働本部の活動を発展させ、充実させていきたい。

○堀家教育総務課長（福島県教育庁）

〔質問〕この推進協議会に係る事業においてはたくさんの成果が出ており、広域的に連携して先進的に取り組まれているが、時間の経過とともにピンポイントでのイベント的なものになってしまわないか危惧している。学校教育課程の中に溶け込ませ、しっかりと位置づけて継承していくために工夫していることがあれば教えてほしい。

○中田座長（放送大学）

〔回答〕「ふるさと創造学」のカリキュラムそのものが、地域の課題に取り組み、対話と交流を通じて子どもたちが力を伸ばしていくアクティブラーニングであり、これが双葉郡の学校教育の中核を担っている。「ふるさと創造学」は総合的な学習の時間の重要な鍵であり、交流という視点でも、他地域の学校とネット使いながら連携し、少人数教育のおもしろさと課題をそこでカバーするなどの他、「ふるさと創造学」に込められた復興教育の理念をいろいろな教科の中で生かす努力がなされている。８町村が多様なフェーズに入っている現在、その経験値をどうつないでいくかは今後の協議会のありようだと思われるが、課題共有については教員研修の場などで新しい課題意識や現実の問題の捉え直しを図っていければと考えている。

○舘下副座長（双葉町）

〔回答〕震災を経験していない、あるいは記憶がない子どもたちに課題意識を持たせるには町の現状を見せて現場を捉えさせることも一つであると考えている。

○堀家教育総務課長（福島県教育庁）

〔質問〕常々、風評・風化の危機感を抱いているところだが、原点に立ち返って、もともとの思いを学校現場で受け継ぎながら発展させていくことが大事だという思いから質問させていただいた。

○根本委員（広野町）

〔回答〕双葉郡８町村は［ふるさと創造学」を中心に、震災以降、自分たちはどう生きるかということについて、教員研修も含めて教育活動を行っている。県の教員研修会においても、双葉郡の［ふるさと創造学」の取組を各部署で共有し、研修を実施していければよい。

○中田座長（放送大学）

〔回答〕双葉郡としては、これまでの経験と努力の足跡を地域内中に閉じ込めるのではなくて発信して共有していくことが県と一緒に成長することでもあるので、今後、なお一層、お互いの協力関係をレベルアップしていきたい。

３）８町村教育委員会の現状と課題【資料８】

○舘下副座長（双葉町）

双葉町においては新しい学校の設置検討委員会が設立され、先日の会議では、双葉町の教育課題やビジョンについて話し合うとともに、委員からも多くの思いが寄せられた。避難先のいわきの学校も充実させながらということになるが、新しい学校の設置に向けて、コンセプトや育成したい人材についても協議していきたい。本町には２名のＡＬＴがおり、将来的にはイギリスとの交流をはじめ、英語教育において独自の教育が何かできないかと考えているところであり、助言を頂戴できればありがたい。

○笠井委員（浪江町）

浪江町では、震災前は小学校６校・中学校３校において 1,700 人の児童生徒が学んでいたが、震災後は小学校１校（８名）・中学校１校（２名）からスタートして６年目になる。現在、中学生の数は昨年の２倍となるなど増えているが、多くは移住者であることから、浪江町に対するふるさと観をつくっていきたいと考えている。また、特別支援学級も設置が認められ、個に応じた適切な教育環境を整えることができていることに感謝申し上げる。教育委員会としては、教育総務課と生涯学習課の２つの課の体制にしたところであり、社会教育の活性化も図っていきたい。

○松本委員（葛尾村）

葛尾村では、帰村率が 29%と横ばいが続いている。学校においても、今年は３名の転入生を迎えたものの、小学校 14 名、中学校５名、幼稚園が９名と少ないままである。少人数という課題に対しては、ＩＣＴを活用した遠隔合同授業、近隣校との合同授業、地域の方々との交流などに取り組んでいるところであるが、一方で、少人数のよさ、地域の魅力を生かした教育が課題となっている。地域の伝統文化の

学習の機会の設定、あるいは子育て世帯への支援など、目玉になるようなものを考えていきたい。教員の加配については引き続きお願いできればありがたい。

○志賀主幹兼指導主事（大熊町）

大熊町では、義務教育学校「学び舎ゆめの森」が会津から移転し、12 年ぶりに学校の機能が町内に戻り、認定こども園も開園した。ただし新しい教育施設の建設は遅れており、２学期からとなる予定である。大熊町の理念は、義務教育学校、認定こども園、放課後児童クラブと、0 歳から 15 歳までのシームレスな教育である。「未来デザインの時間」と名付けた総合的な学習の時間での教育活動はもとより、ICT を活用した個別最適な学びや創造的演劇教育も進めている。特色ある教育内容の活動を通じて、移住を促進し、学校やこども園に通う子どもたちの増加へとつなげたい。

○岩崎委員（富岡町）

町に入ってくる教員は若く、富岡町の学校がどういう経緯をたどって現在に至っているのか理解していないため、研修会を通じて歴史や目標を共有している。町としてはコミュニティの拠点がある学校づくりを目指し、４つの施策を掲げて取り組んでいるところである。子どもの人数は増えているものの、移住・定住施策によって移り住んだ家庭が多いため、保護者の孤立化を防ぐための手だてが必要であるが、こうした町の課題解決のために、ふたば未来学園のゼミに協力いただけないかと考えている。課題解決のために、大人だけではなく子どもたちにの知恵も借りられればありがたい。

○堀本委員（川内村）

川内村の帰村率は 83.1％と高いものの、65 歳以上の人口が半数以上を占める。子どもの数はこども園と義務教育学校を合わせて 100 名前後で推移しているが、加配によって単式学級を維持できている。部活動は野球とバドミントンと特設陸上部だが、野球は人数が足りないため広野町と合同チームで中体連等に参加している。現在、学校の魅力化に取り組んでおり、塾や生涯学習の施設を校舎内に設け、土日も含めて村民が誰でも利用できるようにしている。コロナが落ち着いたところで、長崎大学との「復興子ども教室」、あるいは北海道での「北の大地交流学級」などの生きた体験活動を再開する予定である。

○青木委員（楢葉町）

楢葉町は現在の人口が 6,580 人で、町内の居住率はほぼ横ばいの 66％である。４月には東京大学との連携博物館がオープンし、復興のあゆみや貴重な資料の展示が行われている。町の組織としては、子育て支援を目的とした「こども課」を設置し、子育てを全面的に支援する体制を構築している。来年からはＪＦＡアカデミーの福島女子が楢葉に戻るとともに、来年度中には福島富岡支援学校も再開予定である。町では３月 11 日を「防災と伝承の日」と定め、子どもたちが震災の記憶と記録を伝える活動を続けている。登校方法についてであるが、小学生の 25％が徒歩通学である。中学生については将来的にスクールバスをやめて徒歩か自転車通学に移行できるか検討している。

○根本委員（広野町）

広野町の帰還者の割合は 90.5％であるものの、児童・生徒数については、避難先に居を構えた家庭もあることと少子化によって減少している。ただ、アカデミー福島の生徒が、広野町は男子であるが、3 学年揃ったことで中学生は増えている。南都隣山会からの義援金を活用して学校図書館の活用を図っているところである。復興推進事業では、特別支援学級の支援員を配置するほか、支援アドバイザーによる相談サポートを行っている。ただし、特別な支援を必要とする子どもの数が増えている現状とともに、教員の確保が難しくなっていることが大きな課題である。

○安彦委員（文部科学省初等中等教育局）

〔感想〕報告と本日の視察から非常にすばらしい取組が続けられていると感じた。高校まで継続的に探究活動を行うことは、その後の生涯教育の土台にもなるものである。一方で、幼小の接続は全国的に課題があり、「架け橋期の教育」ということで文科省としても充実させていきたいと考えている。例えば、小学校低学年で演劇を通して他者の理解を深める活動ができないか、中高生と同じようにはできなくても、ふたば未来学園の先進的な取組にヒントがあるかもしれない。また、少人数であることの課題解決のためにインターネットのほかに図書を活用しておられたが、今後、そうした取組をさらに深めていただきたい。

○里見委員（文部科学省総合教育政策局）

〔感想〕今日の５～６年生の授業の中で「葛尾村のいいところをどうやって広げるか」という教師の投げかけが印象に残った。ふたば未来学園では世界に発信するとしているように、双葉郡全体が一つの大

きな学校のようになって発展させることが可能なのではないか。また、０歳から 12 歳までの一貫教育ということだが、これを 18 歳、もしくは 22 歳まで継続できるかもしれないとも感じている。地域学校協働など、非常にすばらしいものであるが、それを福島県内や日本全国にどうやってつなぐかが課題であるが、先ほどの長崎との取組のように、日本各地の災害被災地域と心を寄せて取組が広がっていくことを楽しみにしている。

○石垣委員（復興庁原子力災害復興班）

〔感想〕本日の授業において「ふるさと創造学」の理念がカリキュラムに組み込まれていることに感動した。今、私自身はこの地域の歴史について少しずつ勉強しているところだが、開拓の歴史の中で、新しいことにチャレンジし、サバイバルしてきた強い地域だと感じている。新しさでいうと、今度の福島国際研究教育機構（F-REI）も非常に新しい取組となる。そこでの地域貢献としては人材育成が非常に重要だとの認識している。一方で、働く研究者とその家族に安心して地元に溶け込んでいただけるような環境づくりにおいては地域の方々の力をお借りしたい。

○中野委員（復興庁福島復興局）

〔感想〕本日の授業および過日の「ふるさと創造学サミット」を拝見し、生徒たちの復興への取り組みの真剣さ、また、議論の力量の高さに感銘を受けた。このことから、イベントの事前の準備だけでなく、生徒が日々授業の中で一生懸命学んでいること、先生方の日頃の指導の成果が着々と実を結んでいることがわかる。このような先進的な取組は双葉郡全体で取り組むことが有効であるし、また、教育の分野に限らず、ほかの分野にも展開できればすばらしいと考えている。私どものオフィスは福島にあるので、意見や気づいた点について聞かせていただき、一緒に考えていければありがたい。

○初澤委員（福島大学）

〔感想〕福島大学人間発達文化学類においては、双葉郡のこれまでの経験を受け継ぐ必要性が強く指摘されている。今後、例えば南海トラフや首都直下型地震などが襲ってきた際に、双葉郡の経験をそれらの被災地の教育支援に応用することができと考えているためである。そのためにも、双葉郡の経験を再評価し、研究して記録に残す必要があり、協力をお願いしたい。また、我々としても可能な限りお手伝いしていきたい。

○根本委員（広野町）

〔意見〕F-REI の件について、研究者を呼んでくることも必要だが、地元の人材育成こそ考えていかなければならない。その点をよろしくお願いしたい。

○石垣委員（復興庁原子力災害復興班）

〔回答〕人材育成について、F-REI としっかり共有する考えである。

○中田座長（放送大学）

〔意見〕双葉郡はまだ過渡期にあり、人材育成が重要な課題である。また、本日の議論の中では教員の研修や配置、加配について共通して強調された。教育復興はまだ途中であり、引き続き予算的な支援についてもお願いしたい。

４）その他

⑴ 委員からの情報共有

・特になし

⑵ 今後の協議会開催予定

・令和６年１～２月に第 26 回目の協議会を富岡町で開催予定

４． 閉会

（以上）